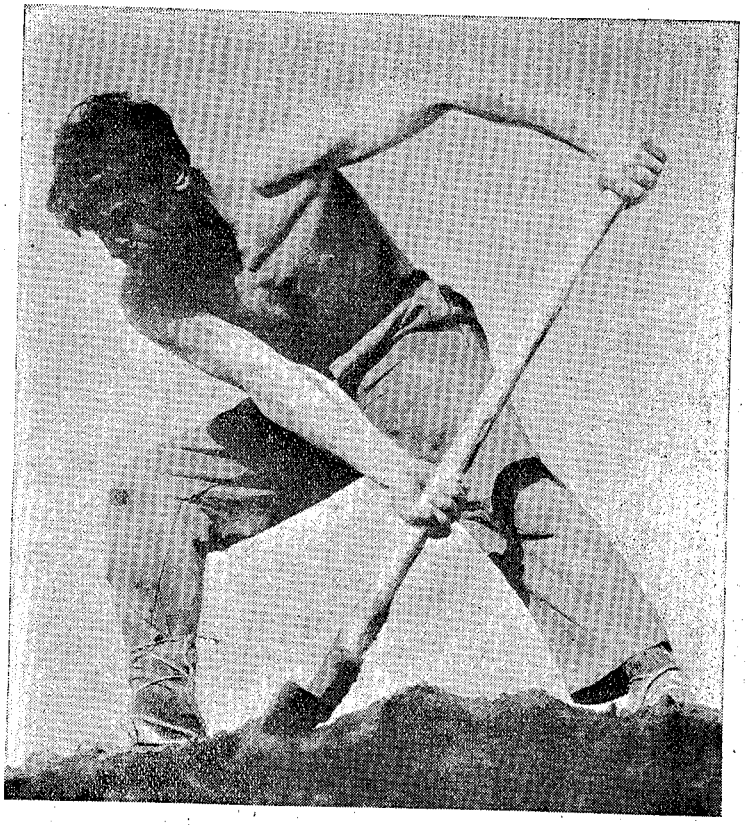
Shinsei

真生

（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）
昭和七年九月三十日印刷納本
昭和七年十月一日發行（毎月一回一日發行）
第十一卷第九號



第十一卷　十月號

目次

全國の同志！……念
吾等の宗教……土屋觀道
座談の夕(四)…名古屋支部
蚊に學ぶ……尉子
古今十方の衆生より……
……長圓寺
お別事歸後感……土屋修
ひかり……
眞生同盟と光明會
……安田恢順
支部通信、吾朋便り……
眞生のマークに就て……

◎全國の同志

□古來多くの宗教的偉人を見るに、それらの人達は皆一人として他人の信仰の模倣者はありません。何となれば宗教の模倣は自分自身を滅すからであります。

□殊に其の中でも、一宗の祖師とも云はれる人達は誰一人として、自分の信仰に立脚しない人とては無いのであります。釋尊にしても、從來の宗教に反抗して起つた人であり、基督でも、ルウテルでも皆當時の宗教改革者でありました。

□其の他我が國でも一宗の祖師は一人として、從來の宗教に反對して立たない人はありません。それは已に一宗の建立と云ふことが此の事實を證明して居ります。

□此の意味から云へば多くの祖師達は皆當時に於ける既成宗教への反抗者であり、又それに對しての異安心者であつたと云つてもよい。

□即ち法然上人、親鸞上人、日蓮上人の如きその最も適例者であります。之を以つて之を見れば私共が多くの人々から、異安心者と云はれ、異端者呼ばはりされるのは必ずしも悲しむべきことではないのであります。

□否、それよりも、反つて百年の後千年の後、吾等の宗教が眞實の宗教たることを今日から語つてゐる證であります。

□されば吾親愛なる全國の同志よ！　異端者呼ばはりは恐るべきことではない。只願くは常に自ら愼みて悔を千歲に後し給ふこと勿れ！（念）

吾等の宗教

土屋觀道

一、宗教とはいかなるものか

吾等の信するところによれば此の天地間に宇宙唯一の絶對なる本尊まします。之を名つけて阿彌陀とする。壽命無量にして光明亦無量である。宇宙の大靈即ち之である。

此の佛に三身在します。一には法身、二には報身、三には應身である。此の三身は本來一佛の三面であつて、まことには三身即一のみ佛である。天地と共なる宇宙唯一の眞神、最高、最勝、至德至善のみ佛である。

一に法身とは如來は宇宙の大法身、一切の諸法は此の法身の現はれである。宇宙は本來全一なるもの、此の全一なる大靈の現はれが差別的には萬象となつてゐる。故に萬象そのまゝが本來法身の現はれである。

二に報身、報身は宇宙生命の根源、宇宙全一の人格現である。一國の君主の如く、一家の慈父のやうに、宇宙最尊の絶對的人格現である。法身は其の體である。從て法身を離れて報身なく、報身を離

れて法身はない。

三、應身とは此の報身の本佛が衆生救濟の爲めに此の土に現はれ給ふた人佛を云ふ。佛教では釋迦牟尼世尊である。吾人が眞に佛を知ることのできるのは此の世尊を通じてゞある。即ち釋尊の心に現はれ給ふ本佛を、無量光壽の彌陀と號したてまつる。彼の國に生ずるものは又無量壽無量光となる。

二、宇宙と人生

吾等が眞に佛を知り、又吾人がいかなるものかを知らうとするには先づ第一に宇宙と人生との關係を知るべきである。

宇宙とはいかなるものか、又人生とはいかなるものか、宇宙と人生の關係如何、之は物心兩面に於て研究すべきである。

或る人は一切の現象を唯だ物質の現はれと見る人もある。又或る人は之に反して唯だ心の現はれと見る人もある。前者は唯物論、後者は唯心論である。

中には宇宙は物心の二つからなると見る人もある、之は物心二元論、若しくは物心併行論である。

今吾等は物心の根元に宇宙全一の絶對生命を認むる。物心は此の兩面の働きにすぎない。卽ち內面的に見れば宇宙の心、外面的に見れば唯物の現象、物心の働きは大靈の活現である。

從つて宇宙の現象は皆之宇宙生命の活現、宇宙意志の現れである。

若し宇宙の現象を能所の關係に見るならば、一切の萬象は法身は能生の體、一切の衆は大靈の分身如來の生命を宿したものである。卽ち衆生の本心は宇宙の生命と一となるものである。

此の意味から云へば我等は宇宙に對して、小宇宙と云ふ。宇宙生命を佛とすれば吾等は佛子卽ち宇宙と吾等とは一體にしてまた親子の關係に在る。

三、一心の十界

宇宙の法身に十界を具するやうに吾等の一心にも十界を具してゐる。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界である。十界と云ふもその實は十界に止まらぬ。或は無量無數の階級に分つこともできる。吾等は、本來此の十界を具するもその生活の緣に從つて、その中の一を現はす。それは進化論者の生物に於ける其の境遇の變化によつて、各種各別の種族が生ずると云ふに似てゐる。心十界を具し、心十界を造ると云ふは之である。

然ば吾等の今日造りつゝある人生の生活は果していかなるものであらうか。業因業果の法則は宇宙の大法である之によつて過去を見、現在を見將來を見るは必ずしも不可能のことではない。

一家の將來、一國の前途も、亦之によつて知ることが出來る。所謂人生の前途は之によつて知るべしである。

四、佛性の開發これ宗教

一切衆生必具佛性とは一切の衆生が皆佛性を具へてゐると云ふことである。性具の佛性も之を聞かなければ無いのも同然である。天下の寶玉も磨かねば光りを發せぬ。

衆生の多くは十界の中、たゞ六道轉廻の迷妄の生活にある。獨り人類の中、靈性の發達したもののみ佛道を成ずる。之永遠の生命を愛し、無限の向上を求むる眞人の生活である。

永遠の生命とは不死の自覺、無限の向上とは償値の生活である。此の道を求むるものは遂に眞實の宗教に入る。所謂陀佛の宗教である。

五、如來と衆生

衆生至心に道を求むれば必ず宇宙の獨尊に達する。至眞にして、最淸き、最高、至善の靈體である。萬法を統攝し、一切を歸趣せしむる、大慈悲の佛である。宇宙唯一の絶妙不可思議の靈體である。此のみ佛に遇ふものは卽ち永遠の生命と、更に常恒の平和を得る。

一切は如來より生じて如來に歸る。如來は萬法の母にして、又萬法の父である。衆生は此の親のもとに育つ子供である。

如來の心は宏大にして無邊、凡夫のあえて伺ふことを許さぬところであるが、一切智能の働きは十方に充ち滿ちて、衆生救濟の大慈悲となる。其の大悲からの現はれが本願の念佛である。

六、稱名と念佛

故に若し衆生佛を見たてまつらんと欲せば至心に念佛するにしくはない。念佛とは稱名の念佛である。稱名の念佛は正にこれ成道の第一義眞人生活の根本中心である。

衆生の心が如來に歸命する第一の方法は念佛であり。又最勝の方法である。衆生佛を念ずれば佛もまた衆生を憶念したもふ彼此の三業常に相捨離せずとは即ち念佛のことである。

此の意味に於て、念佛の生活は正に人類生活の根本中心であり、宗教生活の最高生活である。いかなる善根も念佛を外にしてありやうはない。いかなる惡事も念佛を妨げ得るものもない。

菩薩の願行は念佛を以つて中心とし、之を以つて生命とする。

七、眞生の友に告ぐ

友よ、吾等は眞生の友として、今此の念佛を中心とするの生活に生く。まことに喜ぶべく、まことに尊むべきは吾等の人生である。

凡そ、人と云ふ人の中に、眞に道を求め、道に生き、永劫に限りなき如來の慈光を仰ぐ、世に之ほどの尊き生活がまたとあらうか。

喜べ、樂しめ、吾等は如來光明の裡に在り。而も此の慈光を仰ぎ、慈光に照され、慈光に化せられて眞人の生活に入る。

念佛の數少なしと云へども、已に念佛するものは如來の御子である。友よ！　吾等は如來のみ子たるよ！　念佛を申すもの已に之、如來のみ子たるよ！　願くは皆共に念佛に生きんことを。

（一九三二、九、九）

眞生會座談の夕

（四）

題、宗教の實際化について

名古屋支部

——土屋先生を中心として——

時——昭和七年五月二十日　夜

所——南カヂヤ町　渡部善兵衛氏宅

司會者——堀榮二氏　速記者——丹水生氏

集會者——眞生同盟會員多數

土屋（前號よりの續き）……今日ではモウ珠數もいりませんね。けさもいらない。風呂の中で洗つて居つても、そこに宗教がなければならぬのであつて、如來様の畫像をかけたり、木像を安置してお說教をせねばならぬといふことはないのであります。畫像があり木像があ

るといふことが、各々修養する上に於ての一つの手段であるならばよいが、お說教を聽いて居つても、畫像や木像がないと、信仰迄がなくなつたやうな氣がするのではまだ本當の信仰といふ迄には到つてゐない。

畫像や佛像のない所でも、如來の大悲に充ち滿たさ

れでゐるといふ氣持になる。そういふ氣持で商賣をする、百姓をする、さういふ氣持で勉強する、……そういふ氣持の中に生活をして行くといふのでなくては物足りのない。例へば寫眞を撮るにも、多くの人達は「サア撮りますぞ」といふと、すぐ他所行きの顏になつてすましてしまふ。顏をすますやうに着物も亦すました物を着る。

そういふ他所行きでなくて知らない間にも宗教の現はれが欲しいのです。

仕事をやるにも、信仰から出た仕事がやりたい。冗談をいふにも信仰の中から出た冗談を云ひたい。私はいつもワザとゾンザイな言葉を使ひますが、併し今後の世界は勞働の世界であると思ふのであります。

私の一番きらひなのは言葉を丁寧にいふてゐる卑しさであります。たゞ無暗に上品な言葉を使つて、そのくせ何等の仕事もしない。世に之ほど愚かさはありません。

いくら上品な言葉であつても、それが、只使はんが爲に使ふのであつたならば何の生命もないものになる。寧ろ、どんなゾンザイな言葉でも、その中に眞の親しさがあつたなら、それがいゝ。本當に仲の良い信仰の同志ならば、お互ひにどんな言葉で語り合つても

そこには何の汚れもない。親しみの中から出る言葉であつたなら、その話がそのまゝ既に崇高なものである。

多くの人々はこの眞意を知らずして、言葉が卑しいと誤解をする。

併し私にでも普通に使ふに足るだけの言葉位は知つてゐる。只それをわざと使はぬのは、そこに私の考へがある。

私の信仰は風呂へ入つて丹前一枚で横になる。手枕で男女打ち混つて話をしてゐても、その中に眞實の生命が大切である。一家同志のなつかしさには言葉はお互ひに自由であります。

そこで初めて、今迄の出家の服裝を脫して出家の出家臭さ、味噌の味噌臭い所をなくすることが出來る。即ち宗教であるといふことも忘れてしまふ。

今後の世界はさういふ意味の眞實の世界でなくてはならぬ。それで貴方がたが今更特に珠數を持つたり、おけさをかけたりすることならば私は反對です。もうけさや珠數はそろ〳〵無くしてもよい時代です。珠數はずい分邪魔になる。けれ共「持たなければならぬ、無いよりも有る方がいゝ」といふ人は持つたらよい。

話は變りますが、この十四五年前、私がまだ若い時、

若いといつても三十前後でありましたが、その頃の私が法衣を着け、けさをかけた石上安座の寫眞を見た、それは靜岡の清水の或る人の家に大きな額になつてかゝつてゐる。私はそれを見て非常に感じた事があります。それは素直に撮れてゐる眞面目な姿でありました。それはごく若い小娘のやうに生まじめそのまゝでありました。

今日の私はモウ年をとつた人、四十五十になつた人、それはモウ餘程スレッカラシになつてゐる。常識は有るがスレッカラシになつてスレ切れてゐる。そういふ今日の私から此の若い生まじめの自分の若さを見ると、本當にウブで素直だなあと心から惚れ入つて了ふ。騙せば騙されるほどの正直さでありました。併し今日の私はさうでは有りません。何一つだつて騙されんぞ——修養がつんだから、と餘程修養を積んだ積りだが、そこが私はいやなのです今日の私は私自身がいやなのです。

餘りに修養々々全く修養に苔が生えてゐる。今少々ボーツとして人からでも騙されて平氣でありうる人でありたい——お氣に障つたら許して下さい。惡意でいつて居るんではありませんから。皆樣にもそういふ氣持はいたしませんが。

自分に自分が惚れるのではないが、見てゐて眞に素直だつたナア——いゝですか、素直だつたナア——と感ずる。それが私には何とも云へぬ懷しい氣持です。それを思ふとこの私が可愛そうになる。氣の毒になる私は昔の私を尊く思ふのであります。法衣をつけてゐる。けさをかけてゐる。そうして素直に石上に座してゐる。私の氣分といふものは寸毫も汚れがなかつた。本當に道を求めてやまなかつた私、その頃の私の氣持はだと人が何と解しようが全く尊き生活でありました。一身を捧げた理想の叫び、人が怒ろうが、信じまいが、もう全心を込めて自分の信ずるそのまゝを叫んでゐた今から思ふと、その頃の純眞さが實に私には尊くてなりません。

それで私はその寫眞を貰つて私の家に飾ろうかと思つて欲しいと云つたが、呉れる氣が先方になかつたから、私の手にはないが乾板でもと思つて搜して頂いたが、それはもうありませんでした。

今日でも私の本心は思ふ存分に云ひたいのです。處がそれを云ふと、どうもあつちこつちに當るのが氣兼ねです。併しそれも信者を作つて金が欲しいといふ爲ではありません。そんな事は思つてゐないがそれでゐて思ふ存分にそれが云へないのは、それだけお話が

上手になつたのか、それとも同志の誤解を怖れて遠慮する氣になつたのか、惡く言へば卑しいよく云へば同志を思ふ心だが、素直でないといふ意味から言へば矢張り昔の方が私は好きです。

序だから今一つ思ふまゝを言はして頂くが私の心からなる願ひの一つは、私はもとより凡ての、人々に勞働服が着せたい事です。純粹な勞働の服裝でありまず。草をむしる、稼を拭く、肥桶も昇く、何でもやる。といふ事は働くといふ事であるが、唯精神だけを働かせるのではない、爲になることに對しては本當にどんな働きでも働き得る、筋肉勞働の生活であります。

或ひは今後私はそれを着るかも知れませんが、みんながそうなつて來るとおけさやお珠數といふものは要らなくなりはせんか、否、それでは反つてそれが邪魔になりはせんか、また、お珠數やおけさが要るといふことはお珠數やおけさを着たりお珠數を持つのであつて持たないでもいゝ人になれば、モウ一歩進んだ信仰ではないかと思ひます。私は一番初めの時代をけさも法衣も、珠數も持たない無信仰の時代といつてゐる。第二は、初めて進んで求め、益々深まつて行く上に於て、おけさや法衣があると、身も心も改まつて行くといふ時代、之が今日の一般でせう。それを今一歩進むと今度はおけさや、法衣や、お珠數はなく共、あると同じ氣持で進んで行く、それが第三の時代であります。皆さんはその中のどれに當るか、それは貴方がだの實際問題であります。

でも、素服のまゝで珠數を持ちおけさをかけて佛前に合掌し、こうした集りに集まつて來るといふことも亦大變に結構なことであります。餘り長くなるといけませんからこの邊で打ち切ります。

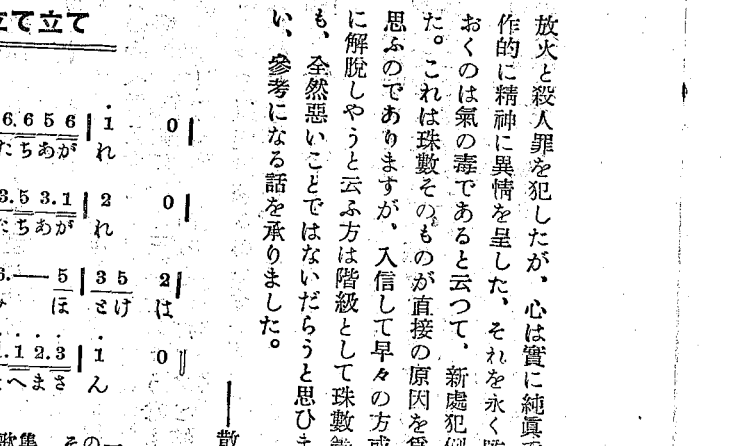
司會者 先生のお如しの如く、矢張りおけさも珠數も一種の階級でありまして、入信から得度するといふ場合に、さういふやうな道をふむでろうと思ふのであります。今日の場合に於てはまだ解脫した人は少いのでありますから、どうしても階級としては珠數位は、日常ポケット或は袂に入れて放さんやうにしてをりますと、間違がないやうに思ひます。これは早晩なくなることは事實でせう。名古屋の裁判所の檢事の或る人が常に珠數を持つてゐると云ふことを、新聞で見ました。それは、之から裁判して、何年何月の懲役を執行してやらうと云ふ前に、お珠數を手にかけてお念佛する。

さうすると、三年にしてやらうと云ふのが、餘りに純情あり、犯罪の動機が簡單であるから、執行猶豫にしてやらうと云ふ氣持が、その檢事の人の頭の中に浮んで來ると云ふんださうです。實は昨年でありましたか、或る人が自分の旦那さんを殺して家を燒いた、殺人罪に加へて失火罪を犯した、實に婦人としては鼻持ちのならぬことです。段々裁判が進むに連れて裁判長がその婦人がいつも珠數を持つてゐると云ふことを目にとめまして、非常に感心なことだと思ひました。そこで「お前は旦那を殺したか」と訊きました、「殺したと云ふんではありませんが、夫婦喧嘩をしてゐる中に私は逆上して精神が錯亂致しました」、「さうだらう、さうあるべき筈だ、一度鑑定して貰つたら宜らう」と云ふので精神學者に鑑定して貰つたら、その時は精神が錯亂して普通の常軌を逸してやつたことだから無罪が適當であらうと云ふて、到頭珍しくも死刑にならずに出て來た事實があります。確か四月二十六日でありましたが、十月の末には無罪になつて出て來ました。その人は私の所へ來るにも、珠數を持つております。この問題は、私は生きた教訓であると思ひます。いつも珠數を持つてゐるから、必ずしもいいと云ふのではないが、それが一ツの例證になつて、あの婦人は放火と殺人罪を犯したが、心は實に純眞であつた。發作的に精神に異情を呈した、それを永く監獄へ入れておくのは氣の毒であると云つて、新處犯例が出來ました。これは珠數そのものが直接の原因を爲してゐると思ふのでありますが、入信して早々の方或は一ツ大いに解脫しやうと云ふ方は階級として珠數等を持つことも、全然惡いことではないだらうと思ひます。大變良い、參考になる話を承りました。

——散會——

立てよ立て立て

八調 3/4



歌詞の二、三、四は紙面の都合上次號へ

作詞 越子氏

古今十方の衆生より（繼前）

大阪　長圓寺住

なきあとに我をたづぬる人もあらば
彌陀の淨土にあるとこたへよ

うれしやなたふとやなとぞいはれける
南無阿彌陀佛の口のひまには

なきあとにわれをこひしとおもひなば
彌陀をたのみしこゝろもつべし

われしなばいかなる人もみなともに
雜行すてゝ彌陀をたのめよ

阿彌陀佛さまふすみなこそふとけれ
人をたすくる法のちかひなり

一念に阿彌陀をふかく信ずれば
やすく淨土へむまるとはしれ

彌陀をたのむこゝろのあるならば
淨土わふじやう疑ひはなし

我れくば誰れもこゝろをひとつにて
彌陀をたのまん身ともなれかし

彌陀のむわが身ひとりのたふとさに
なみだもよほすわいの袖かな

——以下次號——

○逆輸入

田舍では
まだ茄子や南瓜が實らぬ内に
街ではもう喰べ飽いた。
お土産にして行つていゝのなら
田舍へ野菜を持て行つてもいゝ。
全く、市で野菜が實り
山で、魚が飛行便で降ろされる時代になつて來た。
信仰が在家から逆輸入されるも無理はナイ。

○蚊に學ぶ

蚊でも、蚤でも
死を賭して夜着の中へ突入する
爆撃に行く飛行機か、爆破に行く三勇士のようなものです。
人間は案外愚かな事に感心してゐるものだなアと笑つてゐるでせう
それでこそ血に飽いて凱旋出來るのです。
此の一點だけは彼等に學びたい。

○蝸牛は——

蝸牛は
雨が降つても、風が吹いても
家を背負つて歩いてゐるだけに　悠々としたものです。
「家」があると云ふことは幸福だが
それだけ彼を
怠け者にしてゐます
これだけは彼が不幸者です。

——冠子——

お別時歸後感

大阪　土屋　修

何分既往五十年に近い生活に於てたゞの一回も念佛したこと無い無信者ながら、避暑として又寫眞撮影のため其導機を得。洵にお恥かしい次第でありますが、又一面にはそれ丈け特に選ばれ惠まれた有り難い機緣で、今回唐澤山の御別時卽ち眞生修養會に乘り合せまして、どなたよりも、勝手氣儘をさせて頂きました事を、結集の皆樣に厚く御禮申上げさせて頂きます。其勝手たるや、實に言語同斷でした。お念佛の時は調子はづれでわめき立てました尤も始めの内はだまりこみ中程は口中でモグ〳〵、それが終り頃には急にのさばつて大念佛を呼ぶと計り——濟みませんでしたれ、お講義の時は先生の直前に机まで持ち込んで頑ばりそのくせ感想會にはツット坐はつて居られないで縁側に横尻なげ出しマア何と御行儀の悪いこと本當に信敎の赤チヤン、それで皆さんから幼稚な故で、お手々引いて貰へで終りまで御介抱に預りました。おかげ樣に今神谷樣からおすゝめに接して、大膽にも以下書く氣になり得たのです。有り難う。！總てば佛海の一泡沫まあ御免！　實は昨日何とも云へぬ有り難さに或はこれが世に謂ふ所の奇蹟とでも云ふのではあるまいか偶然とか廻り合せだとか云つて片附けてしまふにはチト惜しい絶好のチヤンス！。

さてお別時から歸つてより一年中又とない閑散な數日を幸ひと私は土屋先生の御講話の筆記をひまに任せ牛の歩みで整理しながら、判らぬ事だらけながら、好奇心が物すきか、大それた野心かは知らずどうも彌陀の四十八願テどんな内容を盛つてあるのかしら、何か研究の種本は無いものかと、幸ひに天牛と云ふ本屋が直ぐ私の近所なのでそこへ行つて佛書の棚を漁り小本乍ら淨土三部經の話といふのを見付けて大枚二十五錢で購入戻つて見ると面白い。丁度私の知り度いと思ふ事丈けが要領よく書かれてありますゝ佛機有り難う御座いますと合掌の思ひで其夜即一昨夜讀み耽りました。昨日は其要領を唐澤山筆記の次ぎに拔萃しつゝ味ひつゝ又筒拔けに忘れつゝ？　大經即ち佛說無量壽經の序分を經ていよいよ正宗分に進み皆樣先刻御承知でいらつしやいます通り彌陀正覺の因果即ち阿彌陀如來の本生から出世の本懷たる眞實の敎——彌陀の本願に及ぼしました。

此の所なか〳〵ムヅカシイ　私の今見て居る本は難學默震先生が現代語で丁寧に御話下されたのですからよく咀みくだかれて此の種のものの中では多分ヤサシイ絶項とさへ想はれるのですが然し何と云つても宇宙の眞理を道破されるのですもの又あながち人間の痛弊たる「譯の分つた事をいろ〳〵と理屈を附會したりあれこれと捏ね廻はしたりするものだから」と云ふ譯でもなく矢張りムヅカシイ

唯幸ひなるかな〳〵無礙光、難思光無邊光は喚いてゐます、善導大師の一願結歸に誘はれたる親鸞聖人の眞假判別に依り念佛

往生願の第十八願こそ衆生往生の唯一白道であり法藏菩薩發願の基調は此の衆生濟度より外にない從つて四十八願の眞生命は此の第十八願にこもつてゐる譯であると聞いて大助り！　マア何と云ふ近道でせう其近道も茨に裾を取られたり足踏みとらす急坂の近道とは違つて如何樣地球の地軸を掘りぬいて南極から北極へと一直線に大トンネルが拔けてゐやうに其中を飛行機で一足飛びにする樣な痛快きわまりない御說明を頂戴するなんて有り難い〳〵サテ其第十八願といつば

設我得佛　十方衆生　至心信樂欲生我國　乃至十念
若不生者　不取正覺　唯除五逆誹謗正法

ヤア又ムヅカシイゾ

至心、信樂、欲生は天心と申しまして文字は夫れ〴〵違ふてはゐますがその意は同一で二つながら日本語のまことといふ事でありますやはり至心であります。天親菩薩も三心を傾受して一心歸命を頂いて居られます。

凡夫虛僞の心ざまにもたゞ素直に佛智の不思議光を信受して誠實心に廻向し本當に乃至十念の稱名が其一聲一聲にそのまゝ報謝の行業として自然にこの大信海から流れ出る超世不倶の王本願！　これぞ、

合掌

鳴呼！

それから大千塵の感動あつて爾來菩薩は永却を期し一向精進の結果自利利他滿足して正覺成就遂に阿彌陀佛となられたのであります。

そして三藏二十九種の記述があり華光出佛の一段あつて下卷に入る下卷は先づ衆生往生の因果の說明から說き初められ、救はれて行く相から、救はれた上の功德に入る。かやうに眞實報土の往生は最高級の禮意を修め大菩薩としての資格と實質とを具足することを縷々詳說せられた後に佛陀は阿難に向て「我たゞ汝のために略して之を說いたのである若し之れを廣く說くならば恐らく百千萬劫の長時に亘つても窮め盡すことはできないであらう」と云はれて此衆生因果は說き結ばれました。

今まで釋尊は阿難を對告者としてのみ說法せられてゐたがこゝに至つて忽然「佛告彌勒菩薩諸夫人等」とその當時菩薩の最高位にゐられる彌勒を不意にお呼び出しになつたので一座は「それ一大事出現し」とばかり襟を正し耳をそばだてゝ謹聽姿勢に變りました。

然るにどうした事か話は人間世界の道德が主として話されました。貪慾、瞋恚、愚痴の三毒煩惱のため五惡が生じて仁義五常の道に背く行爲を誡められたのです。

かやうに最高の佛弟子まで呼び出してナゼ卑近な普通道德を說かれたのでせう？　それには實に深い思召が潛められて居ることを考へなくてはなりませぬ。萬機普益の大精神から一切を網羅さる可きではあるが、世間やゝもすれば少し許り智慧が廻ると修業が度重なると「おれはもう」となりたがる。この高上りの心が如何許り悟の邪魔になるか知れませんあの曇鸞大師の言はれた通り「虛往實歸」といふ法を聞持する心がけで素直に

亨け容れるのでなければ折角有り難ひ救ひに直面しても吾から違ざかつてしまふ、流石は佛陀の善巧方便實に有り難い。

そういふ譯で「彌菩薩もこの敎誡の前には頭が上らないすると釋尊は最後に「彌勒よ、汝等おの〳〵よく自らを願み、また互に誡めて佛の敎に背犯するやうなことがあつてはならぬぞ」と懇ろに諭されました。こゝに至つて最上位の彌勒菩薩も最下の凡夫と同列扱ひであるが「受佛重海不敢違失」――かくも御懇切な敎海を蒙りましたからには決して〳〵道背度したり忘失したりすることのないやうに心得ます」と素直に合掌稽首しました。

コヽデ拔き書キノ筆ヲ私ハ擱キマシタ瞑目シテ說者聞者ノ渾然融合セル美ハシイ態度ヲ憙ハック思シテ靜カニシテ居タ時不圖先日ノ唐澤山ノオ別時ガ彷彿トシテ浮ビ出マシタ。

土屋先生の熱心な傳道に對し私共のゐれむりを始めた事は何たる淺間しさであつた事か、でも先生は諄々として說きすゝめて下さつた其時は過ぎた今此の机上に在る經記處在の空白はそのゐれむりの雄辨なる證據を示して居る、其の惜しい御言葉！　其尊いお話！

其最中先生は二度迄私に醫告を下さつたのであつた……

ア、……ウン……

再ビ瞑目シテ居ル時家人ガ今屆イタ計リノ郵便物ヲ机ノ片端ニ置キ去ツタ

見れば稍大形の開き封だ急ぎ取り出しまして展げると墨痕も

あざやかな御名號　南無阿彌陀佛

下には先生の落歎さへある。

鳴呼、此の時、此のお名號

此の廻り合せはお經の內にも見えた「當に珍華を雨らすべし」とあつたが盖しかういふ事ではあるまいか他人の手に依つて奏でらるゝ音樂はこゝ道頓堀に於て珍らしくも今聞えず只獨り澄む我心耳……

瞑つた目に妙華の五彩は無い、けれど、燿く御名號……

市井の寓居おまけに無信者とし佛壇の設けさへ無い我が家今忽然として佛國手輕く生じ御殿隣家に壁二重を以て塀す。

有り難き哉、普遍在

南無阿彌陀佛

身心を道に捧げしことなれば
荒き浪風ものゝかずかは

荒浪のさかまく中もみ佛の
むねに抱かる身こそ安けれ

これは行基寺山田土人が渡鮮傳道の爲十九日玄海灘航海中の述懷をば老生へ申越されしもの
實に熱烈なる信仰の充溢に今更隨喜限りなし

――岐阜白鷺靈光――

ひかり

東京　山田峰子

吾上げし燈のひの十方にかゞやくをみつめ思ふ事なし
み佛の光をあみしあしたより生き行く道のあかるうなりぬ

法

名古屋　後藤美那子

有難きけふのめぐみを喜びてひたに佛のみ名を唱へむ

俤

折々は夢の内にもあらはれて身をば離れぬ君か俤

靈祭して

北支那の嵐と散りしますら夫のみたまむかふるこの盆會式

唐澤山十二首より　大阪　土屋修

唐澤の谷間を登る一つ道小石おぐさも御法さゝやく
唐澤の谷間のいほり小さくあれど御空に亘る聲澄く所

東京　神谷善之進

炎天かまはず登山をするも好きな道なら苦にならぬ
よしたとへ二階借りでも理想に生きりや意地と張りとで精も出る
死してなは盡きぬ望みを持てる身はこれぞまことの幸といふらん

土屋修

法藏菩薩の本願を拜して

いろはにほへどこゝろなく
かげらひし身の　けふはしも
うゐのおく山　ふみもせで
ゆくて　しるけき　御本願
四十(そ)まり八つと　こちたくも
崇くいみじき　おんちかひ
慈悲仁愛のふところに
だかれて　ねむる南無阿彌陀佛

又

有り難やいろはも眞に知らざりし
われ　今誦(ず)さむ　南無阿彌陀佛

名古屋タイプライター校の私の感想は、嘸かし御判じに御困りの事と存じます。あれは私の智慧の足らざると、落付氣の無かりしとに依て話が前後しツヂツマの合はざる點多きが爲、更に思ひの儘申されず皆樣に誤解を生ぜしめんこと、誠に恥かしき次第。申譯は兎に角として、私の考へとしては、釋尊の再來と云ふ問題に對し、法然上人滅後數多の異流を來たして、安心を起行とに付、各々分流を立つることゝなり、引て現在の淨土宗諸派對眞宗の相違點を考へ、而も實際に於て表現的勢力は、淨土宗より寧ろ眞宗の方が實力あるを認めて居る。而も其の眞宗に於ても、眞實の親鸞上人の誠意が缺けて居るを認める、否寧ろ親鸞上人の誠意を云ふ人は却て、異安心呼ばわりをしている事を認めて居る。

それより引て現在吾等が恩師、辨榮上人釋尊出世の本懷を極言せられ古來既成宗教の缺點と眞實とを明にし、宗教としての本來の眞實を發見し發表せられ、初めて古今を楷定して、人生の根本を基定し給ひしことを感謝すると共に、辨榮上人滅後の今日現在を思ふとき、實に法然上人滅後、諸弟子等各々異れる意見を表示して、分派を來し現在勢力の狀態を思ふとき、轉た寒心に堪へないことあり、感胸にせまり、終に言語を亂したことを演じました次第。

斯る意味に於て、釋尊の再生問題に對し、議の如何は兎も角

●眞生同盟と光明會

安田恢順

私の述べたる點は、辨榮上人と宗祖と、宗祖と釋尊とは同一點の眞理の上なりしこと、所謂辨榮上人は釋尊の再生と見たのであります。勿論現在も亦、今後も釋尊の再生は幾人もあることを信ずるのであります。乍然、私のあの時としては其のことを言はんとするよりも、現に行はれつゝある眞義の上に於て、辨榮上人の實理即ち宇宙の大道を物語る上に於て、上人を中心として繞る四圍の諸星、各々光を輝かしては見えます。然しその輝きたるや、勿論辨榮上人の日光を、受け得たる光には相違なきも、而も其處に、辨榮上人が、且て知恩院安居席上にて御述の宗祖の皮髓を物語り遊ばされし如く、やはり、辨榮上人の髓類應間と云はんか、所謂對機說法の皮や肉や骨を知て、其眞髓に未だ觸れて見えぬ方が、無きにしも非ずである、私にかゝる批判を下すことは、誠におこがましき失敬極まる次第ではあるが、學理は學者の識見に依るで、私の信ずる儘をキタン無く言はしむれば、確に一方は皮を語り、一方は肉を語り、一方は骨を語つて、骨髓に及ばざる所說があることを認めるのである。

此處に於て私の見る所、辨榮上人の淸流の下に、現在に於て土屋先生を中心とする眞生同盟と所謂光明會なるものとの二流に分派して居ることは事實で、單なる私の偏見では無い。

其光明會なるものは一般に見て、規律的に一團の下に統制しているかの樣であるが、恰も宗祖門下に於て、四流六派のあり

しが如く、純眞の統制が無い。又將來も此光明會なるものは一團として統制は、六ツかしいものと考へられるのである。

然るに此の光明會なるものより、眞生主義を奉ずるものを見る時、多くの人は辨榮上人の異端者、異安心、所謂如來の眞意にモドルが如く言ひもし、又そう考へているものもある、即ち此等光明會の人々は眞生主義をして、邪義邪見あつかひをして居るのである。

乍然、眞生同盟は表面光明會主張者の如く、主張者としては數に於て先生只一人、孤獨の有樣であり、かつ眞生同盟の人々に於ても、各々宇宙の大道に立つて、互に自己の使命を分割分業的に實行するにより、外見は光明會の如く形式に於て、盛んとは言はれ無いが、其實質的內面に於ては、今や統一ある規律的運動が、盛んに成功しつゝあることは事實上明かである。

換言すれば、光明會は表面、統制あるが如く見えて、內面愈々分派に分派を重ねて行くものと見られるが、眞生同盟の方は表面孤立の地位にあるものゝ、而もその實質に於て、着々として人心の髓に喰ひ込み、而も統一的態度あるものと云へるのである。

斯る狀態に於て、眞生同盟なるものは、實際に於て、周圍の壓迫に於て、非常の難局に立つて居る、だから眞生主義を奉ずるものは自然の理として一層努力を要する譯であり、又事實奮鬪し奮戰しつゝあるのである。今後又層一層の努力と奮鬪とを要するものと思ふのである。

勿論、辨榮上人の光明主義なるものは、人心の罪、病ひ惱みを救濟する一大理法であると共に、事實、人心の向上に於て、衷心に喰ひ入つて行かれた事は、恰も、親鸞上人が、宗祖の念佛を一般的に奉ずるものの中に、一歩を進めて、念佛をして、生活の上に、實際化せられたる如く、宗教の上に於て一大革命者として立たれたものである。

乍然、其親鸞上人の法の流れは、やがて一つの傳統的宗教となり、且つ權勢宗となり、封建的宗教と成つて終つた如く、現在の光明會なるものゝ下に、權勢と封建とに捕はれつゝあるものがある。

之れを思ひ彼れを考へる時、辨榮上人の眞宗の光明主義なるものは、現在の光明會なるものと、眞生同盟なるものとに於て何れに眞意が移て居るかと言ふことが疑はれる程である。

更に私をして憶面なく言はしむれば、所謂、隨他意の說法より、隨自意の說法に重きを置いて、形式より實質に觸れて居るものは、盛なる光明會よりも、孤獨なる眞生同盟の方にあるものと見らるゝのである。尙も今後に於て光明會は、或ひは一つの形式に於て、又封建的態度に於て、一時的勢力を占むるやも知れぬが、眞生同盟なるものが堅實なる地盤を造る時に於て、遂には此等光明會なるものを却て反對に壓迫し、押し込むるやも知れんと思はれるのである。

斯くの如く考ふる時、眞生同盟なるものは、今後如何に重要なるものであるか、又如何に奮鬪を重ねゝばならぬかと言ふ意味に於て、眞生同盟を盛んならしめんとする方々の爲に、批判と云ふよりは寧ろ一層の努力を要する譯なることを述べた次第であります。

乞ふ、幸ひにも微意のある所を汲まるゝ方々にも寬恕あらん事を。

合掌　敬白

支部通信

吾所便宜

大石支部報告　第六月

春蠶の上簇、麥の收獲、稻の植付、等農家は今非常に多忙なのであります。一回の養蠶に約一ヶ月を要します。そしてその間に約一貫乃至二貫程も體重が減るといふ程農民は忙しく働かねばならぬのですこんなに働いても働いても尙生活は保證され難いのみならず益々ドン底へ突き落されてゆくのだと思ふ時、僕は涙ぐましくなります。氣の毒だと見ては居られぬ思ひです。

賣られればならぬ繭は安い。木炭は安い。買はればならぬ米は高い。唯一の賃銀勞働は木材安の爲に殆んどない。これでどうして生きてゆかれるのでせうか。僕は我事のやうに農民の前途を憂ふ。

六月の大石支部は會員の殆んどが農家である爲に廿二日の例會日は淋しいものでありました。

松坂に於ては、行基寺樣の御巡錫を得多忙な中から熱心に努めて下さる道友の力によつて、第三回の講演會を催しました。時は廿五日午後八時、會場は第三小學校。學校では先生方は申すまでもありませんが、小使さんまでが非常な御好意を下さつて、夜おそくまで無報酬で御世話下さつてゐます。青年會の方にも亦實に熱心に御後援下さつてゐる事も只感謝の極みです。

此處でも會費がない爲に講師の方も旅費自辨でお越し願つて居ります。會場も無料でお貸し願つて居ります。其の他お世話下さる方々も皆無報酬で働いてゐて下さいます。

第一回の講演會をした時は五六十圓の經費を要したのでしたが、今では四人の會員が五十錢宛を出し合つて僅か二圓の金で一回の講演會をさせて頂いて居ります。こんなたやすい事で講演會をさせて頂くなんて、全く勿體ない事です。

土屋道觀先生より

――信州から――

（前略）――只今丁度午後五時です。原稿を書いてゐる處に下から郵便が着きました。手にとると「眞生」です。開いて見て驚いたのは表紙の畫でした何といふキビ〳〵した表紙でせう、今後の眞生を一見して知ることが出來ます。こゝに我等が永年求めて止まない眞生行が躍動してゐるのを見ます。全國の同志よ！全人類の生く可き道がこゝに示されてある！此の畫の心こそ眞生そのものであります。私は叫びたくなりました。

何事を爲すにも此の意氣が無くてはなりません！神谷氏の口繪も結構です。內容の記事並に配合も紙質も上出來。若し慾を云ふなら之をカナ附きにする事と今少しカットを入れたいですね。座談の夕は三段組にして行を度々かへる事ですね。裏の表紙もよく出來ました、定めし全國の讀者も喜んで下さる事でせう。各地の新しい記事もドン〳〵と入れて下さい。（以下略）

土屋觀道先生より

――岐阜から――

九月十三日午後四時半、私は今、岐阜市長良川の河畔、山下鵜匠の別邸に居ります。そぼふる雨の中に長良川をへだてゝ岐阜の金華山を左手に眺めつゝ此の筆

を走らせて居ります、五時から大阪に向ふのでありますが、私は昨日大垣から此の地に來て、昨夜此の宅で道友の集りをしたのでありました。

□集る人は其の數が少くて十八九人でありましたが十數年來の道友のことゝ、特に水入らずのくつろぎとのどかさの間に鵜飼を見ながらの念佛の集りでした。

□之はあまりにも近頃の不況の爲めに民心が疲れ切つてゐるのだから、一度ゆつくり道友のみの相談をすると云ふことと、一つには私の傳道の疲れを休ませやうと云ふ限りない道友の計らひからでした。

□當地の道友達は近年のうちに一度全國の道友を此の地に招いて、此の長良川の景勝の地に鵜飼を見て頂き乍ら、道友の集りを願つたらと申してゐられます。乍序右の旨全國の同志に御一報申しておきます。

□猶、眞生誌も愈々八月から私の手を離れて、獨立することゝなりまして、神谷（善之進）、坂井、谷口（春鄕）、青木等の諸君が全力を注いで其の方に御盡力下さつて居ります。願くは此の際各他の同志も更に一層の御援助を御願い申します。特に各地の狀況やら、各人の御感想若しくは眞生發展の方策など御示し頂きたいと思ふのであります。

在住横濱一愛讀者より

……降て不肖事毎度「眞生」を拜讀させて頂き精神的に大に得るところ有之、常に感謝いたし居る者に有之、茲に厚く御禮申上候。

就ては先師に對し有まじき僭越なる申分にて恐惶の至りに候も私としては公平無私の考へとして申入候次第御寬怒下され度候、「眞生」の內寄稿年月日に西洋曆の年號を御使用遊ばさるゝ事は微細の事なれども東洋哲學、殊に日本には紀元二五九二年といふ不可犯の年號のあるに？尙ローマ字のシンセイも？

山口常照樣より　——仁川——

先生！　平素の御無禮を御許し下さい懈怠の妄執が離れんと見えます。偖て眞生紙上にて伺へば、先の行基寺の樣の別時及今年の唐澤の別時に眞生同盟の革新運動が行はれ規約が制定せられ更に眞生誌も盟友の手によりて編輯せられる樣になり紙面に更生の氣分が現はれた事は喜ばしい事と遙か淋しい朝鮮の空から祝福いたして居ります。誠に世は混沌としてその趣くところを知らず、げに眞生の一路開けずば人の世は全く無意義となり終らん。幸なる哉我等は先生によりて生くべき道を啓示され、細々ながらも眞生の生活を體現せんものと精進するてう事は何たる幸福でありませう。我等はこゝに此の人類の幸福を築くために一層の努力を拂ひたいと存じます。先日編輯部の方から支部としての通信及寄稿をせよとの事でありました。茲二年間は或る問題の爲めに靜觀的態度で參りました、例の邁斯光も一時休刊じてそんな都合で通信すべき事もありません、たゞ八日と廿五日に例會を開き無量壽經に由つて法藏菩薩の心持を研究し味ひ以て現代との交渉を觀察して生活の力として居ります。寄稿はその間に何か發表さして頂く事に致します。

中野善英樣より　——津島——

昨夕一生懸命に張つてゐたクモの巢が今朝は破れたまゝ、何も懸つて居らずに風に吹かれてゐるのを、見るこ氣の毒になりました。何でも一生懸命に努力した割に所得が少いクモの世界にもそうした悲慘な祕々聊めてヒトゴトならず思はれました。

而しクモがあの希望をもつてセツセと張つてゐた處に亦多分裏まれてゐたのではありませんでせうか我々のクモの巢の世界にも風が吹きつめです、努力しませう。……（以下略）

田中文雄樣より　——福岡——

（前略）……現代世相を觀ますに偶々身を提して救國の念に燃ゆる士を得るも、右か左か何れも明治大正の誤れる惡敎育の影響を多分に受け、切角の熱意も却つて國を害せんとする狀にて殘念千萬にて候、何れも外形的改革にのみ沒頭して內的改造に目覺むる者少きは危險なる事にして、此の期にありて人ありて指導せずんば、と深慮仕り候。

此度直接先生の御敎訓に接して先生こそ國事多端に臨んで人を得た喜びは非常なものにて候……（以下略）

田中行雄樣より　——上諏訪——

……（前略）金澤市の妙慶寺では御住職が更られましたが朝夕十分參詣念佛させていたゞきまして、暑熱も忘れ切つたやうな次第です。六日、日本海の荒浪を眺め大きな强き自然に心ときめかし乍ら久し振りに鄕村に歸りました。街燈が一つもともつてゐないのは農村疲勞の結果かなどゝ心病めしめられましたが故鄕程に懷しく心落ち付く處はありません。生命の魂のまことの故鄕に辿り着いた時の觀喜を想像致します。……（以下略）

法月光二樣より　——靜岡——

……（略）眞生の口繪唐澤山を見た時なつかしさに思はず泪しました。先生の添書を頂き夕暮の山路をとぼ〳〵あの御寺にまゐつた時の心持はいまも御淨水の樣なきもちを湧き出させます、あの時のやうな求道心が、こんな不精者にもあつたのです今更にはづかしい思ひがします。

記事豐富に付他は次號へ

誌代拂込者御芳名次號へ

編輯後記

私共が編輯の任に當つてから、も早第二號を送り出す事になりました。これが全國の讀者のお手元に行くのだ……そしてみんなの熱心によんで下さるのだ……とそんな事を考へるとゾッとする。重大な責任を感じます。そして、何とかしてもいゝ雜誌にせなければならないといふ熱が湧いて來る。希望が湧く

表紙の寫眞は餘りいゝので今月も用ひました。何といふ崇高な、力强いポーズでせう。「この男を見よ」と叫びたい位です。徒なる論議も、不熟なる學も、此の男の前には消失せて了ふ。

立ち上ろう。各々のシャベルを取り上げて、太陽の下、大地の上に、打ち建てん眞生の淨土。（虛）

「眞生」原稿
締切——毎月廿日
送り先——
東京市京橋區入舟町三ノ三ノ一
谷口虛空

大正十四年八月十三日第三種郵便物認可
昭和七年九月卅日印刷納本
昭和七年十月一日發行

Shinsei

眞生マーク

□八咫鏡は我國では三種の神器、神の心、晴明を現はす。八稜の八は開く稜は發展焰の燃ゆる形、神の心の表象である。

□星は明星、夜明の星、東天に輝く夜明けの星である之は人生の希望である。

□●は太陽、即ち大日輪、自已の本心、本有の自性、衆生の赤心である。或は宇宙の生命を示す。

□之を佛教の意にあてはむれば、八咫鏡の八稜なるは八正道、又八葉の蓮華を現はす。蓮華は慈悲、鏡は智慧、即ち如來の大智慧大慈悲である。蓮華の白色なるは淸淨鏡の空色なるは佛智の皆空、涅槃の寂靜を示す。

□星は希望、皆空の大空に輝く人生の希望である。釋尊の成道は、此の曉星を見て、悟りを開かれたと傳へてゐる。この星はこの傳説に因つたものである。星の光の五つなるは如來の五智光を示す。

□●は衆生の佛心、その中心に王座を占むるは如來の大慈悲に包まれて、吾々が希望に輝く生活である。赤色は赤心、即ち衆生の誠心である。衆生の誠心はこれ佛性、佛性本來如來の佛心と一體である。

□されば此のマークは衆生の本心が如來の大慈悲に懷かれて、限り無き人生の希望に輝く眞生の表象である。(念)

發行所
眞生社
東京市芝公園十四號地九番
振替東京四七二八八番
電話芝一六一〇番

東京市芝公園十四號地九番
發行兼編輯人 土屋觀道

東京市外澁谷町中通二ノ四二
印刷人 副島愼夫
印刷所 丹丘舍印刷所
電話青山七九一番

本誌定價 一部 十錢(郵稅共)
半年 六十錢(同)
一ヶ年 一圓(同)